



はじめてとらきち君からの手紙を読む方へ、はじめ君は店長の初孫です。多少の可愛いがりすぎは、お許し下さい。



はじめ君とよう君です。はじめ君先日、よう君を転がせて遊んでいました。もう、ビックリポンです。よう君は、もう目が見えるみたいで、目で動くものを追うようになりました。早くしゃべらないかなあ～(^_^)



「遺伝子スイッチ・オンの奇跡」工藤房美さんの書いた実体験の本です。工藤さんは、夫と子供3人で新築した家に住んでいました。朝早くから夫と子供の弁当作り、そして遅番と早番のある仕事をしていたため、睡眠時間は2～3時間という、忙しい生活をしていました。

ある日、職場で大量の鼻血を出し、病院で末期の子宮癌を宣告されます。そして、「ラルス」という子宮内で放射線を照射する大変苦しい治療を3回受けることになります。

1回目の治療の時、麻酔を使用せず、身動きができない程台にくくりつけられ、口には声が出ないようにタオルが突っ込まれました。1時間ほどの拷問のような治療が終了したとき、自分が癌になったことを責め続けました。

2回目の治療の前日、三男が通っている学校の先生から1冊の本が届きました。封筒の中には、「生命の暗号」という本が入っていました。著者は、世界的遺伝子工学の権威、筑波大学名誉教授の村上和雄先生です。「人の身体には約60兆個の細胞が有り、その一つ一つに1ページ千語で千ページの本三千冊分の情報が入っている。人間のDNA=(細胞の核)の内、実際に動いているのは全体のわずか5%程度で、そのほかの部分はよくわ



かっていない、つまりまだスイッチがオフになっているDNAが多い。

人間はいつも前向きに元気ではつらつしていると、全てが順調にいくようになる。そういうときの心の状態は、よいDNAをオンにして、わるいDNAをオフにする働きがある。」

これを読んだとき工藤さんは、「ばんざ〜い」と叫んでいました。「人間に生まれてきて良かったあ！」工藤さんは、眠っている残りの95%のDNAのうち、よいDNAが1%でもオンになったら、今よりも少し元気になるかも知れないと思ったのです。「もしその本に、すべての遺伝子のスイッチが100%オンになっている」と書かれていたら、今頃私は生きていないだろうと言っています。

村上先生の本には「生命の誕生は奇跡です。一組の両親から生まれる子供には、70兆通りの組み合わせがある。つまり、人間は生まれてきただけでも大変な偉業を成し遂げたのであり、生きているだけでも奇跡中の奇跡なのだ」と書かれてありました。工藤さんは、70兆分の1の確率でこの地球に選ばれて、望まれて、生まれてきたことに、すばらしくて、嬉しくて、ありがたくて、涙が止まりません。

明日の辛い治療の前に、工藤さんは今まで自分を支えてくれた60兆個の細胞に「ありがとう」と治療の直前まで言い続けます。不思議と前回のような拷問のような痛みはまったくありませんでした。その後、肺と肝臓に転移が見られましたが、「ありがとう、感謝」の言葉を10万回以上言い続けガンは消えました。余命1ヶ月と宣告されて、今年で10年になります。

ここにあること、いることが当たり前と思うのは傲慢です。今年17歳になるポメラニアンのココは、もう目も見えず耳も聞こえず歩くことも出なくなりました。毎日、抱きしめながら「いてくれてありがとう」って100回言おうと思います。「ありがとう、感謝」は魔法の言葉です。